

〒001-0014
札幌市北区北14条西3丁目1-12
TEL:011-758-5344
FAX:011-746-5449
E-mail: igakusei@dominiren.gr.jp

発行：I・I・M・M・I・I 協同組合

夢 Dream Vol.73

ゆめ・どりーむ

北海道民主医療機関連合会

Special対談

「未来の医師としての私」

～医師 × 医学生～



医師(産婦人科)×研修医×医学生のコラボ対談が実現!

「なぜ医師を目指したのか?」「医師の働き方」など
今自分たちが感じていることをざっくばらんに語り合いました。

対談日:2018年11月28日(水)

なぜ医師? どう働く?



西岡 利泰 医師
(にしおか としやす)

東京都出身
2006年 北海道大学卒業
同年 勤医協中央病院 初期研修
2008年 道東勤医協 内科医研修
2011年～勤医協札幌病院 産婦人科

【西岡】医師を目指したきっかけってある?

【鳥井】私は中3の頃、進路を考える中で人生や勉強する意味を考えていて、生まれたからには、人の役に立ちたいなと思いました。「命は根本的なところにあるって、わかりやすく人を助けた」と思える職業が魅力だと思ったのがきっかけかもしれないですね。あと、好きな小説の話で、精神科医の主人公が、薬にあまり頼らず患者さんと深く関わっていて、医師はそれだけ色々できることを知り面白く思いました。先生方が医師を目指したきっかけが気になります。

【松元】私の祖母は段々身体が動きにくくなるパーキンソン病(※)で家族全員で介護していました。祖母の診察に付き添った時に、お医者さんから孫つまり私たちのことを聞かれて、祖母はすごく嬉しそうに表情をしていました。医療的な関わりはもちろんですけど、何気ない一言の影響を見て憧れたかな。

【西岡】僕は中学生の時に子ども会のキャンプに行き、一緒に長い時間を過ごす中で、「人と関わるのはこんなにおもしろいんだ」と感じてたこと。医学の方に視点が変わるきっかけは、その頃に薬害エイズの事件(※2)があったことかな。吉田君のきょうけは?

【吉田】風邪で受診した時にもった薬がよく効くことを不思議に思ったのがきっかけで、最初薬剤師を目指しました。でも、薬学部は医学部と違って疾患については習わないので、もっと病気のことを知りたいと思ったんです。ふと、今後のことを考えた時、医者にならたら出来るが増えると思いついて医学部を目指しました。

【西岡】将来の働き方のイメージは持っていますか?

【吉田】地元の青森県は、医療のアクセスがあまり良くない一方、医療を求めている人が多くいます。そういう所に還元できる医療者になりたいです。そして臨床試験の橋渡し研究にも関わりたいですね。

【西岡】視野が広いね。そう感じましたか?

【吉田】特に影響を受けたのが当時、十和田市で産婦人科がなくなつたニュースで、妊婦さんのインタビューから医者の偏在を知ったのがきっかけです。(※2018年現在、産婦人科診療再開している医院あり)

【鳥井】私もまわりの人から人望がある田舎のお医者さんに憧れます。小さい「ミニミニ」ならではの出来ることって沢山あると思っています。

【鳥井】お互いの顔を見合わせられる関係だと、より良い医療がつついていける。まわりの人を守ってあげようって想像して、最近嬉しくなっています。でもやっぱり精神科にも興味があって大迷い中です。

【西岡】薬以外の関わりで患者さんが大きく変わっていくところに惹かれました。働きたいけれど、働き方もそういうイメージ?

【鳥井】そうです。精神科は薬の調節をするイメージが強かったのですが、患者さんの背景を見る必要がある事を奨学活動などで勉強し、生活と地域全体に関わるお医者さんになりたいと強く思います。

【西岡】なるほど。山岸君は実習で訪問診療にも行ってましたけれど、やっぱり地域に出ていく医療のイメージが強いのかな?

【山岸】はい。地元の滝川市は、市立病院以外の大病院はあまりない所です。小さい頃小児科に通っていた際、市中からちよつとはずれた所に住んでいたんで、遠いな、地方にも病院があればなと思つてたこときっかけで医学部を考えました。地域に近い医者になりたい思いもあるんですが、産婦人科も興味があります。最近地域によつては子どもが少ないですが、産婦人科が少ないから都会に出て行ってしまうと思うので、産婦人科こそ地域に必要だと思つています。僕は医者が少ない所で働きたいですが、産婦人科は都会の中核的な所にあるイメージがあり、どうしたらいいかなと思つています。

【西岡】どうしたらいいんじゃないかと思つておる?

【山岸】医者の出張でできないかな。例えば釧路と根室、根室には産婦人科があつてもお産ができないんですよ。釧路根室間はとても遠いと聞いているので、そういう状況を作れたらいいな。

【鳥井】産婦人科でなぜそういう状況なんですか?数が少なすぎて中核にしか行けない、そこを補うので精一杯なのですか?

【西岡】理由は主に2点かな。まず、お産は24時間365日あつて重要な場面が夜間でも休日でも来る。だから基本的に気が休まらなくて、少人数でやっていると結構辛いので、10年以上前から集約化の流れになっている。大きい病院で8〜10人程でやると、当番の時以外は休める。次に、妊婦側にも医療者側にもお産に対する安全志向が高まっていて、NICUや緊急時の輸血体制などが整っている環境でのお産が望まれているところがあるのではないかと。でも山岸君の視点は良くて、まさに地方の衰退は若者がいなければならぬんだよね。地方の活性化を考えた時に産婦人科はひとつ大きな鍵になると僕は思っているんだ。松元先生は学生時代のイメージとの違いはある?



鳥井 沙南 さん
(とりい さな)
札幌市出身
北海道大学
医学部医学科3年生
札幌医科大学ダンス部

【松元】学生の時は患者さんや地域と距離が近い働き方がしたいと思っていましたが、働いてから専門科を突き詰めていくのもすごく楽しいし、患者さんのためにもなるなという視点も出てきました。

「健全なスペシャリスト」とは？

【鳥井】今突き詰めていきたことはあるんですか？

【松元】興味があるのは腎臓内科。透析患者さんが他の疾患で入院した時に、点滴の量などの意見を求められてやり取りをしているのを見ると、自分に自信が持てる分野があるのが素敵だなと思ってたんだよね。

【鳥井】私も総合診療科になりたいと言ってきたんですが、色んな人に得意分野は持った方がいいよと言われていて、それが精神科だったりになって思ったんですが、それが求められていることなのか、うまく研修できるのかイメージが湧かないんです。

【西岡】例えば勤医協中央病院は道内1、2位を争う救急車の受け入れ台数だけで、患者さんの中には精神的な問題を抱えている人がいて、そこに関わる人がいるのはすごく重要なんだ。民医連は昔から医師の働き方のスタイルとしてよく「他のことも知っている中で自分は」の所を力を発揮する」という「健全なスペシャリスト」を薦めていて、民医連はそういう医師を育てる土壌はあると思うよ。松元先生の話でいいなと思ったのは、透析のスペシャリストになって透析だけをやるのではなく、他科からのコンサルトというのが出ていたことだね。連携に興味があるというところかな？

【松元】そうですね。総合病院は腎臓内科だけじゃなく、合併している他の疾患も見れるし、困った時に相談する相手も同じ病院に居て知識も更新されていくので、働く場所としてありだと思っています。

【西岡】健全なスペシャリストだね。ちなみに吉田君は出身の青森の現状を見ていけるけれど、将来的にはそういう状況の所で力を発揮したい？



松元 慕 医師

(まつもと めぐみ)
札幌市出身
2017年 旭川医科大学卒業
同年～勤医協中央病院
初期研修開始



山岸 幹治 さん

(やまぎし かんじ)
滝川市出身
札幌医科大学
医学部医学科2年
硬式テニス部

【吉田】「に」でもネットを通じて最新の医学へのアクセスも良くなってきているので、それと医学の発達をつまぐ使って、中核都市に居ながら田舎で医療に携わり貢献出来る働き方が理想ではありません。

【西岡】そういう取り組みが出て来ているけれど、各地域で求められることは実は違うんだよね。どこで働くかによつて自分が身に付けた方がいい能力もまた変わってくるんだ。地域の現状には医療だけではなくてむしろ医療以外の所が関わってくるので、僕は医療以外の社会的な部分にも興味があって勉強するようにしているんだ。山岸君は医療以外の興味や気になることはある？

【山岸】高齢化と少子化が一緒に来ているという話です。その中でどういう医療をするのか考える必要があると思います。でもそれが医師の労働時間が長いという流れに繋がっちゃうのかな。

医師の労働環境

【西岡】医師の労働時間の話が出て来たけれど、日本は世界と比べても人口あたりの医師数自体が少ないし、現場で働いているも足りないのは明らかで、基本的に北海道はこの科も足りないんだ。北海道の医師不足の議論は、例えば地方に医学部を作る、あるいは地方に来る医者を育てる学部を増やすといった、大学や医学部についての話がよく出てくるんだ。東京医大の不正入試問題もあったよね。率直にどう思った？

【鳥井】全然その知識が無かったので、まだこんなことがあるんだってびっくりしました。今年の医ゼミ(※3)では、この問題に対して医学生から何かアプローチしようかと、「私達は」の問題に反対し解決を望みます、その背景にある労働環境の改善を同時に望みます」というアピール文を出しました。女性差別や労働環境問題もそうですが、入試が就職試験化しているのがすごく問題だと話になって、何で大学入試という学が権利を持っていて医学の勉強のためにみんなが受けられる試験のはずなのに、既に医師として働くことが前提で選抜されるのになって。今の世の中でこんな事があっちゃいけないなとすごく思いました。

【西岡】なるほどね。でも、実際の医療現場はすごく大変で、妊娠出産で仕事を休むことや夜勤、当直の勤務を軽減することで、他の人へ負担が行く。だから女性医師が増えると今の医療現場が回らないから、一定数減らす事は必要という意見もあるんだよね。これは男性医師もだけど、実は一部の女性医師からも出てきているんだよね。

【吉田】女性医師から出るのは意外です。

【鳥井】私も「出産で休みます。育児が大変で少し時間減らしたいです」となった時は、多分、申し訳ない気持ちからそう言っちゃうのかなって。そう思うくらいなら確かに男性医師で固める方が良くて気持ちになるのもわかるなと感じてしまいました。休んでも大丈夫って思える環境だったらいいんですけどね。

【吉田】重要なイベントのひとつだから、「その時がきたか、体に気をつけて」という優しい世界があればいいね。

【鳥井】それこそ医師は少子化に貢献してしまおう。

【西岡】少子化問題で言われるのが、出産、育児がしやすい環境にないこと。それが色濃く現場かもしれないですよ。松元先生は仕事している立場からどう見えます？

【松元】私の周りは、女性医師が増えるとそれはそれで困るのである程度理解できるという意見が多かったかな。何を持て平等と言ったのが大事なかなと思います。男女が全く同じように働くのが平等なのかって考えると一概に男女差別だとは言えない問題だなと思いましたね。あとは女性医師が産休などで休む時に、「申し訳ない」と思わなくても良いためには、医者数が倍くらいは必要かなという気がしちやいますね。

【西岡】今はまた少し減らす政策に変えたよね。でもそれくらいいたら、自分の人生がかなり豊かになりそうだな。ただ、今の日本の医療体制に加えて、患者側や国民全体の意識も課題とてあつて、国全体として目指す方向を定めることができればと改善されると思うよ。僕が関わっている視点でこの問題をみると、性教育なんだよね。産婦人科は病気になる人に関われるチャンスが多い所も魅力で、性教育はその最たるものなんだ。その中で、最近性は多様性の話をするんだよね。この問題は、女性も「男、男性は」って決めていて、そが一番気になるね。



吉田 真之介 さん

(よしだ しのすけ)
青森県出身
北海道大学
医学部医学科3年
弓道部(創設者)

学生時代の経験・出会いを大切に

【西岡】今日話したことは、色々な人の出会いの中で出てきた考えなんだ。当時は医学や自分の将来と全く関係ないと思っていたけれど、それが積み重なって自分ができているのだと今では実感しているよ。就職すると周りが医学で固められてきて、自分が意識しないうちになかなかそれ以外の所にもつながりなくなるんだよね。一方、学生時代に医学以外の所にもつながりを持つよね。そういうつながりが将来的な自分、医療者としての人間が作られる種となり、最終的に花開くこともあるのではないかと思っているよ。松元先生も学生時代の経験が活かされたというところはある？

【松元】雑内のフィールドワークが印象的で、患者さんに血液検査の説明をする無茶振りがあつて、実際に説明する難しさを学びました。あとは市全体で地域医療に取り組んでいて、働いてからも地域医療を考える機会があつた時に、その時のことをイメージしたり。学生時代やってきたことが、意外な形でつながるのには本当にあると思います。

【鳥井】色々な活動をしていると、ふと良い医者になるって大学の勉強だけががんばった方が正解なんじゃないかと思うことがありました。今日話を聞くと、色んなことをやっても大丈夫なんだと励みになりました。

【吉田】今やっていることを頑張りますよ！



(※1)パーキンソン病：脳の異常のために、身体の動きに障害があらわれる病気です。日本には約15万人の患者さんがいるといわれ、高齢者に多くみられる病気ですが、若い人も発症することがあります。日本メイジックス(HPPより)

(※2)薬害イソ事件：1980年代に血友病患者に対して加熱処理したウイルスを不活化した干いた血液凝固因子製剤を治療に使用したことにより、多数のHIV感染者及びエイズ患者を生み出した事件。(Wikipediaより)

(※3)医ゼミ：『全国医学生ゼミナールの略称』全国の医療系学生が、学習会や交流会を通じて今の医療を取り巻く問題を学び、自分たちの医療者像について語り合うのが医ゼミです。(医ゼミ Twitterより)

北海道実習 ~2018~

北海道民医連は医学生の実習を積極的に受け入れています。

「医師になりたいと思ったきっかけはなんですか？」...振り返ってみませんか！

「どんな医師になりたいですか？」...将来の医師像を考えてみませんか！

実習に参加した学生さんのレポートを少しだけご紹介します！

北海道勤医協 小樽診療所

「カルテと巡る診療所探検」

仲谷美憂(北海道大学3年)

医師以外の働き方が知りたいという希望から、小樽診療所での実習が決まりました。その方法は斬新でした。受付から診察・検査、薬局での処方まで1つの診療所内で行われているからこそ実現できたものだと思います。患者さんが診察券を出し、受付棚から紙のカルテが取り出されたのと同時に実習がはじまりました。カルテと共に受付での様子や、看護師さんのスピード感溢れる問診、待合室で朝早くから来ている患者さん方、忙しい診察の中でも笑顔を忘れない先生、次々とオーダーされる処方を素早く袋に詰めていく薬剤師さんたちを目の当たりにしました。今までみたことのない視点から病院を見ると、たくさんものにつくことができました。

道南勤医協 函館後北病院・江差診療所

「患者さんの気持ち、地域を知る」

古月瑞新(九州大学5年)

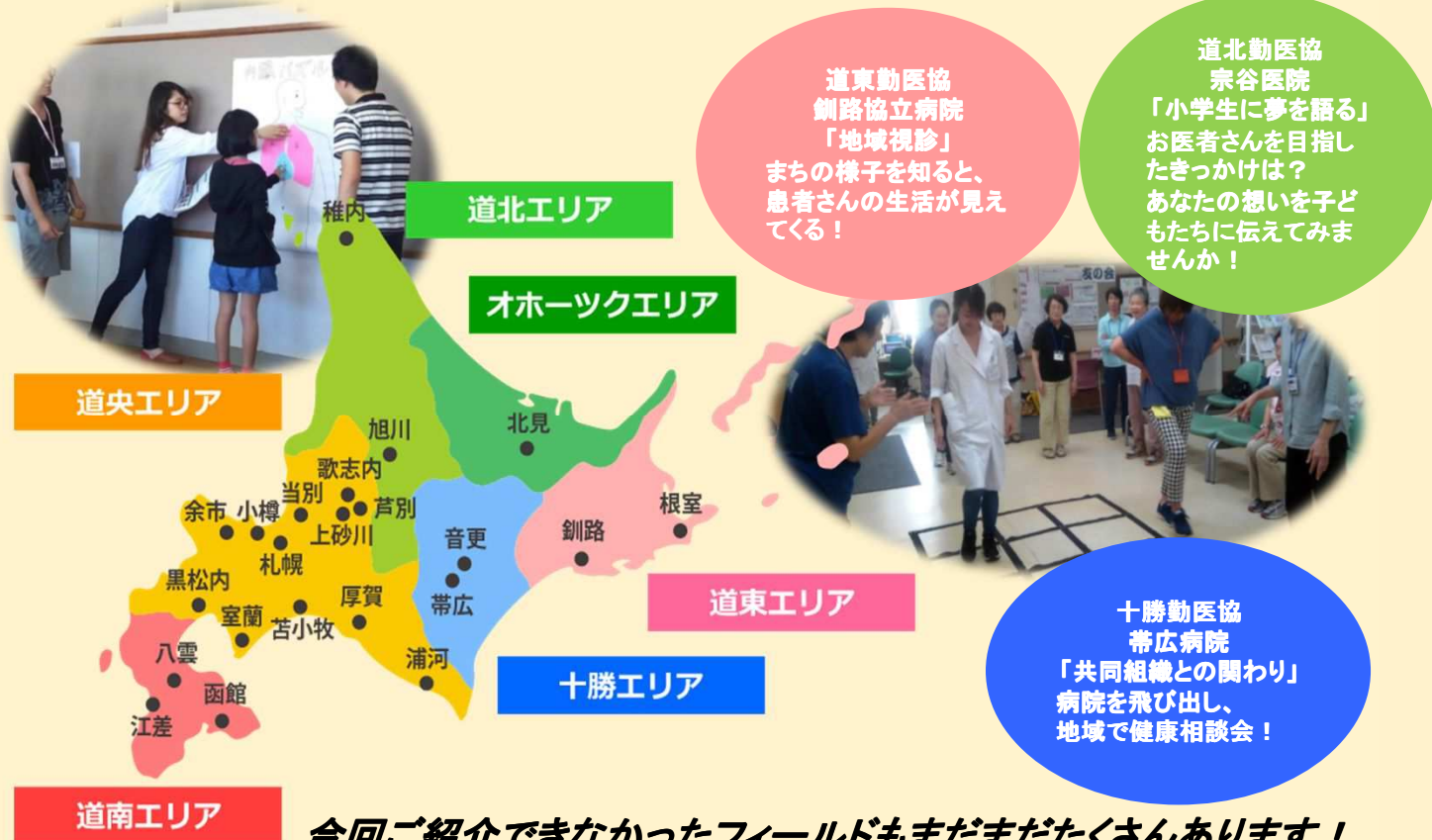
到着して間もなく、リハビリテーションについて医師が語ってくれました。患者さんとのエピソードや、やりがいについて、とても楽しそうにお話されていたことが印象的です。その後のリハビリテーション科では、セラピストから様々な装具について説明を受け、実際に装着させてもらいました。このようなことは大学ではできず、患者さんの気持ちが少しでもわかるきっかけとなり、とても貴重な経験となりました。翌日の江差診療所の外来見学では、地域柄かじん肺患者さんが多くいました。医師から診察の間合丁寧に解説され、実際に聴診器を聞かせていただいたことはとても勉強になりました。午後は役場で地域の保健福祉について勉強しました。過疎、少子高齢化や生活習慣病など地域が抱えている課題の一方、出産・子育てや糖尿病重症化予防プロジェクトなど地域の取り組みを知りました。医療的な学びはもちろん、その地域のことを学べる実習はとても貴重です。

北海道勤医協 芦別平和診療所

「共感できるお医者さんに」

鳥井沙南(北海道大学3年)

特に印象に残っていることは、難病を患っている一人の患者さんからの学びです。その患者さんは、先生の明るいキャラクターもあってか、「こんなに楽しい病院だとは思わなかった」と仰るほど、往診時にはキラキラして見えました。しかし次の日、診療所にその患者さんが精神的な症状で運ばれ入院することになりました。「昨日はあんなに元気だったのに！」と信じられない気持ちでした。病に苦しめられる患者さんがどれだけ辛い思いをしているのか常に心に留めておかなければならないと感じました。患者さんを含め、出会うことができた人に共感できるお医者さんになりたいと思いました。



今回ご紹介できなかったフィールドもまだまだたくさんあります！
私たちと全道各地の様々な医療・福祉の現場を体験しましょう！

北海道民医連の奨学生活動 ～将来どんな医師を目指しますか？～

奨学生活動では、日常的には各大学で学年を越えた交流、時には全国の医学生と一緒に学ぶ機会があります！こうした学習や交流を通して、あなたのなりたい医師像を深めていきましょう！

医徒場楽(いどばた)☆ミーティング(旭川医科大学大学生向け)

民医連の奨学生が自分たちで勉強したい内容を決めて、講師を招いて開催する学習会のことです。奨学生以外の学生もちろん参加OK！

例えば「糖尿病って何が怖いのか」「子どもの貧困の現状」「漢方と薬膳ってどう使うのか」「海外で医師としてできることとは」など学習会の内容は毎回異なり、医学だけに留まりません。

学年も関係なく参加でき、医師や看護師、栄養士の方など多くの職種が集まります。意見や見方も多様になり、交流自体も大変楽しいです！

皆さんも勉強会に参加してみませんか？一緒に企画してみませんか？



医学生ミーティング(北海道大学・札幌医科大学大学生向け)

毎月1回夕方から定期開催！医療のこと、社会情勢のこと、何でも語り合います！学生に魅力を一言で語ってもらいました！

参加者10人くらい！！日によって3、4人(泣)

会場は北大近くの会館！！(北14西3)

医学生魂イ！！(学校ではできないけど学びたいこと、考えたいことを皆と一緒に突き詰めていくことができます。)



【つどい】「民医連の医療と研修を考える医学生のつどい」の略称です。

年3回開催、全国から集まった医学生がテーマに沿って語り合い、共に学び交流する場です。

<旭川医科大学3年 鈴木 織江> 患者さんに信用してもらえる医師になりたい

子どもの貧困に関するテーマのつどいに参加して、相対的な貧困に直面している人は、社会や人、制度から孤立していることや子供の発達にも影響を及ぼすことを学びました。講演を聞いて、将来医師になった時、診察室にきた患者さんが本当に伝えたいことをくみ取れるようになり、患者さんに信用して打ち明けてもらえるような医師になりたいと思いました。

さらに、病院だけでなく学校など教育現場にも赴き、どのような支援制度があるのかを子どもの段階から学ぶ機会を与えたり、病院に行けずにいる子どもを学校で発見する工夫など、貧困の連鎖を少しでも断ち切るような取り組みを考えていきたいです。

全国の仲間と学ぶ



なりたい医師像を深める



【北海道民医連奨学生合宿】

北海道民医連の奨学生が集い、道内各地の民医連事業所で学習・交流を深めます。

<旭川医科大学5年 今石 和紀> 子どもの貧困は負の連鎖で生じる

毎年恒例のこの合宿、北海道民医連の奨学生が一堂に集う良い機会です。

今回のテーマは子どもの貧困です。まずは勤医協札幌病院産婦人科医の西岡利泰先生にご講演いただきました。

子どもの貧困は負の連鎖によって生じ、子の貧困は親の貧困であるとのことで、産婦人科ならではの症例もご紹介いただきながら、妊娠や出産、育児における貧困問題について学びました。どのようにしたら負の連鎖を断ち切ることができるのか、学生同士で議論も盛り上がり、子どもの貧困の現状を実感しました。

またその後、元札幌皮膚病診療科の木村鉄直先生が開かれた、子どもレストラン「リトルディッパー」を見学しました。食育を大事にされる先生が、365日3食食べることができ、子どもが夢を叶えるための場所になればとの思いで開かれた子ども食堂です。先生の意志と、必要だと思ったことを実行できる行動力には敬服いたしました。

勉強の後は奨学生同士、食事やレクリエーションで交流を深めることができました。

【九州・沖縄つどい】道外大学に通う北海道民医連の奨学生もいます。4年生は臨床実習が始まり、自分の【医師像】を改めて考える時期です。そんな4年生だけの集まりが福岡県で開催されました。

<大分大学4年 佐々木 啓佑> 僕らへのエールのようなひと時

大学生活も折り返し、とりあえず一通りの知識を身につけて(いることになっている)、部活では中心となったりもする4年生。

最近いろんな会社がマッチングだとか、初期研修だとか難しいことを話しに来るようになりました。ただ...正直言ってさっぱり実感がわかない、イメージがわかない。そんな中で学生から医者への卵へ掛け渡しをしてくれるのが『九州・沖縄21卒のつどい』です!! 研修医の先生や院長の先生、さまざまな目線からアドバイスをもらい、また同期と共に語り合う。実際に将来を意識し始める僕らへのエールのようなひと時でした!

仲間と将来を語る



北海道民医連のご紹介 「いつでも・どこでも・だれもが安心してよい医療を」

1946年働くものの立場に立つ診療所が診療を開始しました。以来、北の大地に根をおろし、常に病める人々や地域住民の方々と手を携えて歩みつづけ、やがて診療所が病院となり、全道へと広がり、1978年に北海道民医連が結成されました。病院・診療所のほか、訪問看護ステーション、老人保健施設など、医療・介護のネットワークをひろげ、地域に密着した医療と介護・福祉活動を展開しています。

◆実習のご案内

北海道民医連の施設では、医学生の実習・見学を1年生から積極的に受け付けています。札幌をはじめ、旭川・函館・釧路・帯広・北見と各地に病院があります。

希望に沿って担当スタッフと相談しながら見学先を決めることができます。私たちの医療に触れてみませんか？お気軽にご連絡ください。

◇勤医協中央病院 医学生課(札幌市東区東苗穂5条1丁目9-1)

Tel: 011-780-3346 E-mail: chuou-hp@dominiren.gr.jp



◇道北勤医協 一条通病院 医局課(旭川市東光1条1丁目1-17)

Tel: 0166-34-2111 E-mail: ichi-jou@dominiren.gr.jp



◆奨学貸付金制度のご案内

月額 120,000円

医学生さんを対象とした奨学貸付金制度を設けております。北海道民医連の奨学生になって一緒に学び、充実した学生生活を送りませんか。詳しい内容や資料のご請求はお気軽に下記までお問い合わせください。

【奨学貸付金に関するお問い合わせ】

北海道民医連 住所: 〒001-0014 札幌市北区北14条西3丁目1-12

Tel: 011-758-5344

E-mail: igakusei@dominiren.gr.jp

